

昭和三十四年七月二十三日
行第(三種郵便物認)五
(毎月一回・十五日発行)

(通第一五二号)

慈光

第十三卷

第十一号

目	念を法海に流す……………池山栄吉(1)
	霊前にかたる……………池山友子(5)
	釈迦微笑の素懐……………花田正夫(10)
次	道宗の遺跡を訪ねて……………長谷顕性(13)
	教行信証「信卷」講話……………近角常観(19)

念を法海に流す

………信 後 雜 感………

池 山 栄 吉

さればたゞ一つなり

「一人居て喜ばば二人と思ふべし。二人居て喜ばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」

私達は聖人とともに喜ばしていただけるばかりでない。

そのよるこびの湧いて出る源、信心そのものについて、聖人のそれと、私達のそれと、すこしのかわりもないのを確信することが出来る。

「源空が信心も如来よりたまたわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまたわらせたまいたる信心なり。さればただ一つなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」

何と、きび／＼した文句ではないか。他方信心の一大特長はここだ。

「大願清浄の報土には、品位階次を云わず、一念須臾の頃に、速疾に無上正真道を超証す」

私達は、その智愚善悪を超越した、一味平等の待遇に、一面恐縮に堪えないと同時に、他面いい知れぬ満足を感じずにはいられない。

心 絃 諧 調

「哀れなる哉、恩顔は寂滅のけぶりに化したまうといえども、真影を眼前にとどめたまう。

悲しい哉、德音は無常の風にへだたるといへども。実語を耳の底にのこす。」

七百年の星霜をへだてながら、親鸞法然の両聖人と一坐して、心絃の諧調を感じることに出来るのは、一に如来からたまわつた同じ信心の御蔭だ。

「さきに生ぜんものは後を導き、後に生ぜんものはさきをとぶらい」相たずさえて同じ光を仰ぎ、同じ泉に酌み、同じ蔭に憩い、同じ道を辿る、その唯一の合詞は、同じ念仏のほかにない。

恋しくば南無阿弥陀仏をとなうべし
われも六字のうちにこそすめ

俱 会 一 処

「今生夢のうちの契をしるべとして、来世の悟の前の縁を結ばんとなり、われおくれなば人にもなわれ、われさきだたば人を導かん」

亡き妻が不治の病にかかつて、それと知れたとき、悲歎のなから、うれしさの身にもあまるを覚えたのは、この御女であつた。

「樂しきはじめおもうごと、かなしきおわりたえ難し」やがて幽明境をへだてても、心と心とは永久に結びつけられて、浄土の対面を期することが出来たからであつた。

無 別 道 故

「同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるに四海のうちみな兄弟なり」

世々生々の父母兄弟なる一切の有情は、一心帰命の一念に、同じ御親の愛子として、永久かわらぬ精神の上の兄弟となり、会者定離の相對界の理法を脱して、俱会一処の絶対界に、この世ながらの志願を達成することが出来る。現に親子なり、夫婦なり、兄弟なり、朋友たる人々の間に、現当二世の結縁が確認された時は、独去独來の心淋しさも、おのずからうすらぐというものだ。

安樂仏国にいたるには無上宝珠の号と

眞実信心ひとつにて無別道故ときたまう

還 相 廻 向

「お前に御信心がいただけなければ、親子といつても此世だけのこと、あの世で一緒になることは出来ない。だから是非御信心をいただいで、御浄土にまいられるようにしないではいけぬ。私はさきに行つて待つているから。しかしどうしてもいただけなければ、まあそれでよい。私が仏となつたら、衆生済度に出て、よしお前がどこにどうしていようと、一番にお前を救い取つてあげようから」

亡き母が、私の子供の頃、よくこう云われたのが、いまだに耳の底にのこつている。私はどれだけこの言葉にひきつけられたかわからない。まだ信仰がぐらついて、如来が隠見出沒していた頃、大分信的傾向から遠のいた矢先、この言葉を憶い出しては、俄に後戻りをしないではいられなかつた。

今更おもえば亡き母は、如来の御使として私に信仰をすすめ、且は還相廻向の確信から、未通りたる浄土の大慈悲心をもつて、一子のために尽して下さつたのであつた。

往相廻向の大慈より還相廻向の大悲をう

如来の廻向なかりせば、浄土の菩提はかがせん

弟 子 一 人 も も た ず

信仰はわがはからいで得られるものでない。むしろ如来

他力のはからいで、わがはからいのやんだところが信仰なのだ。わが力で獲られるものでない信仰は、またわが力で人に与えられるものでない。それだから真に獲信の体験のある人には、わが感化で人に念仏をもうさせようなどという考えの起るはずがない。

聖人が「親鸞は弟子一人もたずそうろう」とか「如来の教法を十方にとききかしむるときは、ただ如来の御代官をもうしつるばかりなり。さらに親鸞めずらしき法をひろめず、如来の教法をわれも信じひとにもおしえきかしむるばかりなり。そのほかなにをおしえて弟子といわんぞ」と仰しやつたのは、ほこりにきこえるのをきらつて、ことさらに卑謙な言い廻わしをされたのではない。真実内心の確信をそのままうちあけられたに過ぎない。

「この上は念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからいなり」とあるのは、一寸見ると「自分はもう言うだけのことは云つてしまつた。この上はどうしよう」と諸君の勝手だ、自分の知つたことじやない」と云つたような頗る冷淡な言い方ときこえるが、これもその実、信仰はひとえに如来の御催しによるという確信から出てくる虚心坦懐な態度に外ならない。平素信者の間に立ち交つて、御同行御同朋と呼ばれたのも、やはり同じ思想のあらわれと受取れる。

衆禍波転

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破して、速に無量光明上に到り、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵う」

亡き妻が、娑婆の終りを前にみて、大悲の矜哀に生きたとき、至徳の風静に、衆禍の波転ず、ということをしみじみ味わせていただいで、光明の広海に浮びぬる身の仕合せを深くよることであつたが、これも一時、かれも一時、無明長夜の闇は、無碍の光明に晴れながらも、煩惱の黒雲はまだ信心の天を覆うて、法性の覚月のあらわれるとき、涅槃の境にはあこがれもせず、曠劫流転の苦惱の旧里にばかり恋々としている。これが私達の平生だ。

煩惱にまなこさえられて 撰取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて 常にわが身を照すなり

悲哉愚禿鸞

「悲しい哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数にいたることを喜ばず、眞証の証に近くことをたのしまず、恥ずべし、傷むべし」

聖人は、私達の言わずにはいられないことを、前もつて言つておいて下さる。

「さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、我等が身の罪惡の深きほどを知らず、如来の御恩の高きことを

他力の信心うるひとを うやまい大きに喜べば
すなわちわが親友ぞと 教主世尊はほめ給う

一人一人のしのぎ

「如来の教法は総じて流通物」だが「信仰は、一人々々のしのぎ」だ。念仏は自分のすくわれたありがたさに、内の思いが口に出て声となつたもの。それ以外に何かの意味が寓されていたら、その念仏は怪しいものだ。

「親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念仏申したることいまだそうらわす」とあるのは、自然そうなるので、そうした考えのおこるのを斥けて、わざと念仏と没交渉たらしめるという次第ではないのだ。

これにつけても考えられるのは、私が母の存生中、歎異抄を読むたびに、いつも母を側に呼びながら、今日はひとつ母のために読んできかしてあげようと思つたことの一編もなかつたのは、孝行心のない私のことだから、そうあつて不思議はないのかもしれないが、それにしても余り変だと、われながら不審に堪えないことであつたが、ひよつとしたら、前と同じ理由によるのではなからうか。

追善のための念仏がありえないとともに、同様の理由で、現世の利益を祈る意味の念仏もまたあり得ない。追善や祈禱の意味が念仏の中に打ち込まれるのは、まだ本当の信心がいたっていないしるしだ。

も知らずして迷えるを、思い知らせんがためにてそうらいけり」

聖人は御感じのままを述べさせられても、それがそのまま、私達への御さとしときこえる。しかも一々私達と同じ立場にたたせられて仰しやるのだから、たまらなくありがたく、また云いようなく頼母しく感じる。

力あるときにきいて 日深毛骨傷

人間総々として衆務をいとなみ
人命の日夜に去ることを覚え
燈の風中に滅する期しがたきが如し
忙々たる六通定趣なし

末だ解脱して苦海を出するを得ず
云何安然として驚懼せざらんや
各強く健にして力ある時に聞きて
自策自勵して常住を求めよ。

私の貧弱な信の実験を、臆面もなくさらけだして、世のものわらいとなるのも恥じないのは、まだ他力の信に徹しない人々に強く健にして力ある時にきて、力なくして終るとき用の意がしてもらいたさに参考の一端にもと思つて婆心に過ぎないのだ。

灯の用意かしこし秋の暮
心ある人は貧者の一燈ともゆるしてくれよう。

「絶対他力と体験より」

靈前に語る

池山友子

(註) 池山先生の一週忌の追想録『呼子鳥』にのせられた、友子

夫人の御手記であります。それは昭和十三年十月廿二日、

池山先生の御病氣が絶望視された日から始つて、十一月八日御往生の日までの一日一日をしのびながら、先生の御露前に語りかけておられる文であります。その中から、先生の御臨末の法語をひろつて、十一月の先生の忌月号を飾らせて頂きました。この文をものせられて年ならずして、友子夫人も亡くなられました。御記録の抄出につき不十分な点が多いことと思ひますが御諒承願います。

昭和卅六年十月末日。

編集者記。

昭和十三年十月二十二日。

……お祖母さんと愛子とが、いつになく不安な面持で、私を迎え、

「お父さんが夕方から変になつたのよ……」
というのです。……すぐ病室にかけつけますと、六畳の間の簞笥の前にのべてあるお床の上にあなたは悄然とお坐りになつて私を待つていて下さるようでした。……
「さつきから物がいゝにくゝなつたんだ。どうも変だ。」

「ことによると今夜だめになるかも知れぬからお前は寝ないでついておいで」

と真剣な中にも余裕を見せながら申されました。あわて者の私は、はや氣が転倒し、言う言葉も分らず、しばらく暗然と控えていましたが、やつと氣をとり直し

「本当にそんなお氣がなさいますか、おえらいでしようがもう一度、元氣を出して下さい。あなたはこの家の光なんです。一生涯お寝みになつたまゝでもかまいませんから、せめて生きてだけいらつして下さい」

一生懸命に哀願しますと、

「生きてくても命がないじやしようがない……南無阿彌陀仏……可哀そうに、たうとうお前も一人になるんだな……」

と言つて、じつと私の顔を見つめ、淋しく微笑まれましたので、私は数日来、我慢に我慢を重ねていた涙の堰が、ついに切れてしまいました。

「あゝ、可哀そうに、然しこれで別れきりじやないんだよ、そのうちにまたあえるから……」

……私はかねてきかされた御法もどこへやら、覚悟も落着も失いはててすっかり取り乱してしまいました。然るにこの愚かにも恥すべき私の一言半句も疏かにせず聞きとつて、やがてにつこりとして

今度はもう駄目だよ」

と小声の中に力をこめて仰言いました。……

あ……病みつかれてここに五年、心臓病、慢性氣管支炎、動脈硬化症、肺氣腫、という幾多の病をもちながら、よく病苦に堪え、病を呪わず、氣をあせらず何事も業報にさしまかせて、ただ念仏しながら、ひたすら養生にお励み下さいました。

十月二十三日。

川畑愛義先生が

「一応御親戚にお知らせ下さい。私一人では責任が重すぎますから、立派な先生方をお呼びして頂きましょう」と御注意下さり、谷口先生、渡辺先生、藤繩先生、舟岡先生、林先生、神前先生、森井先生、の御来診を仰ぐ……。

十月二十四日。

御自身の死を予知せられてから今月は三日目。いよいよその期の近づいたことを自覚されたか……

「しつかり念仏するんだ、しつかり念仏するんだ。どこまでも念仏でつながっているんだよ、いゝか、南無阿彌陀仏」

と諄々と説かれるお念仏に、私はやつと御親の懐に氣附かしめられ、すがりつく思いでお念仏にかえらせて頂きました。

十月二十九日。

朝、愛子をお側につけておいて髪を上げている時でした。愛子が「お母さん。お父さんがちよつと」と呼びましたので、何事かと胸を冷しながらかけつけますと、あなたは愛子に背中の手当をさせながら、床の上に坐つてにこ／＼していらつしやいました。……私の顔を見詰めながら御不自由なお言葉の中から

「きのうから言おう／＼と思つてたことをやつと思ひ出した。愛子に念仏が出るようになったよ。今も手当しながらお父さんと一緒に念仏をしてくれたんだ」

と、後にいる愛子と前にいる私とを交互に見つゝどうすればこの悦びが満足出来ようかという御様子なので、私も「まあ／＼何という嬉しいことでしょう。よかつたね愛ちゃん、これ以上の親孝行はありませんよ」と申しますと、再びおぼつかない語をついで

「そりだ、きのう愛子に、父さんは今度はもう駄目だから一緒に念仏しよう、といつたらね、素直にしてくれたんだよ」

と、昨日の次第を思いつくままに語つて下さいました。私はたまらなくなつて

「これまであなたのお導きで、家中の者が、次々とお念仏を喜ばせていただきましたが、たうとう最後に愛子が喜ばせていただいてこんな嬉しいことはありません。もうこれで思い残されることはありませんね」

と涙ながら申しますと、頸もちぎれんばかりうなづかれて

「あゝ父さんも喜ぶ、この母さんも喜ぶ、あの母さん

(前の夫人)も喜ぶ、みんな喜ぶ」

と言つて私の顔を見詰め、次にすぐ目の前に掲げてある愛子の本当のお母さんの写真を目で指され、狂喜されるお姿に私も愛子も感泣してしまいました。

「お祖母さんもよんで」

と促されるままに家族四人、一室に集り、今こそ永遠に手をつなぐことの出来た親子夫婦の縁を心ゆくまで喜び合ひ、如来の御恩に心からなる感謝のお念仏を申させて頂きました。

やがて愛子が「きのうお父様が便箋と万年筆をもつて来いとおつしやるので、もつて行くと、御自分のお言葉

書きとつておけ、とおつしやつて、これを私にお書きとらせなされたの。そしてこちらは、お父さんが御自分でお書きなされたの」

と言つて、あなたのお言葉と絶筆を見せてくれました。

お言葉は「南無阿弥陀仏を言え」、お筆は「南無阿弥陀仏アイユ」というのであります。

あゝ生死の境に彷徨しながら、なお後に残る薄倅な娘が気にかかり、どうでもこうでも、この救いの糸だけは握らせておかねばと、お念仏を説きつづけ、この世の置土産にまで書き残して下さいたこのお念仏、これこそあなたの真実の願であり、お生命の姿でありました。

十月三十日。

この日、村上らく(長女)が映坊を連れ、川西信也(四男)と共に見舞に来てくれました。恰度その時、お床の上に坐つていられましたが

「お父さん、どうです」

と尋ねてくれる二人の顔を見るなり

「子供をあちらへやつて」

と命ぜられ

「父さんはもう今度は駄目だ。あゝ可哀そうに、念仏しとおくれ」

と泣き崩れる二人の手を次々と握り、繰り返し々々切願されるのであります。親の願はただこれ一つ、可愛い子達

を永劫の闇に迷わしたくない、一日も早く真実の生命を得させて、先々は光明のお浄土で永遠の手をつないで行こうとの三世の御親そのままのお心であつたのです。

たゞ涙あふれて頭も上りません。幸この時、渡辺先生も御同席下され、共に「お念仏の中に涙をお分ち下さいました……」

御容態は一進一退。衰弱は日に々加わつて、食慾不振は益々募るばかり、寝かせては起し、起しては寝かせ……そのお苦しみの中にも家族の者がお側によりさえすれば「あゝあゝ可哀さうに、南無阿弥陀仏」と、絶えずお慈悲を御廻向下さいました。

十月三十一日。

お言葉の自由が漸次失われてゆく上に、お身体の自由もお目の自由も失われかけて来ました。……今日は亡き御母上様の十九年目のお祥月命日であります。……

お寝み前、食間のお薬を水薬を水呑に傾けますと、静かにお念仏されました。やがてお薬がすむと、お顔を綻ばせられて、何か囁かれたい御様子なのでお口元に耳をよせますと、とぎれ／＼ながら

「何も残るものはない、何も残るものはない。

ただ念仏だけが残つてくれる、ただ念仏だけが残つてくれる。偉いこつたよ、有り難いこつたよ」とお声はそのまま消えました。

十一月七日。

寝台の正面に掛けてある御自筆の「一心正念直来」の軸をじつと見詰め、やがてすぐ左側の壁に目を移され、何事かしきりにお心の表示がありましたので、それとお察しして「親鸞におきてはただ念仏して」の軸をとり出して掛けますと「そりだよ」とばかり、いかにも満足そうな御面持で暫く見入られ、やがて御声高らかにお念仏申されました。すでに一切のお言葉の失われてしまつた今日、なおお念仏ばかり失われぬ不思議を思う時「ただ念仏のみぞのこれり」の尊さに感きわまるのであります。

十一月八日

午後三時十九分

御往生

六十七歳

先生の御晩年の或日、蓮華谷の御宅をお訪ねしたとき、
軽い冗談をまじえられて、

「楊貴妃とクレオパトラの美をあわせた絶世の佳人と、
三井、三菱の富を集めた財宝をもつて来て、念仏と換えて呉れと言われても、まさか迷うこともあるまい。……然し、念仏者としてたつたひとつ美望にあたいするのは、御伝鈔にある聖人の御臨末に『それよりこのかた、口に世事をまじえず、ただ仏恩の深きことをのぶ。声に余言をあらわさず、もつばら称名たゆることなし。……頭北面西・右脇に臥したまいて、経に念仏の息たえおわんぬ』とある、あの御姿である。もつとも念仏者にふさわしい御臨末である。といつて自分がそうなれるなどは思われない、さるべき業縁の次第であるが……」
と仰言つて、微笑念仏していられましたが、聖人の御往生に髣髴とするものであります。

聖人おゆかりの鳥部野に茶毘し近角先生御電送の

無碍院待山 釈一道栄信士

の法名が御仏前にかかげられました。

聚墨記

取次の行きたる方ゆ師の君の吾が名を言はず声ぞきこゆる
聲咳しほがきの声ひとつしてドア開き師出しなでましぬ笑みのゆかしく
折々に思ひはありて果さざりし六年振りなる今日ここに見
ゆ

とりわきて言うことあらず来し吾を健かに見ゆと師の宣は
す

まみあへば念仏したまふ先生の清すがし御顔にわれは足らへり
師に聞きてここに仰ぐものあり今日もまた聞くこの一
つこと

かつてわが思ひなづみて来にし時多くのことは宣はざりき

昭和十年十月廿七日

洛北蓮華谷に先生を訪ひて

釈迦微笑の素懐

提婆だいばにそそのかされて瞋いかり狂うた阿闍世あせせは、父王を投獄して食物を絶ちました。その王にひそかに食物を運んだ母后いんだい章提をも宮殿の奥深く幽閉し、かたく出入を禁じました。ここに章提は歓楽の天辺から、哀傷のどん底において、雨と流れる涙の中から、遙かに釈尊のまします所を拝し、救いを乞うたのであります。

すべてを知ろし召す釈尊は、たちどころに章提の前にお姿を現されました。章提は且驚き、且謝しつつ、大地に身を投げて、愚痴の一杯を訴えました。

釈尊はしすかに、大海が河水を容れるように、うなづき／＼愚痴のありつたけをみ胸におさめて下さったのであります。張り裂けるばかりの夫人の胸もようやくおさまると釈尊は微笑の中から、初めて御口をひらかれて

「汝、今知るやいなや、

阿弥陀仏 ここを去ること遠からず。

汝、まさに聚念けねんして、

諦あきらに、彼国かのくにの浄業を成じたまうひとを觀ぜよ」

花田正夫

とお告げになつたのであります。

私共はここに、仏語の中に沈潜せしめられます。

釈尊とピンバシヤラ王との道交は深く深いので、王は仏成道じやうどう後ほどなく王城の近くの靈鷲山りやうじゆせんに寺を建ててお迎え申し、常に開法せられることすでに四十年に及んだのであります。釈尊にせられて見れば、王城の内外の事情は掌中の脈すじを見る如くに知りつくされ、一人々々の業因も業縁も業果も深く察せられると共に、その根本の解決の道は、阿弥陀仏の救済をこうむるのみと、かねてから深く心に決していられたのであります。

今やその機縁が熟して、章提は仏前に、苦惱の一切を投げ出してお救いを求めるに及びました。ここに釈尊がこの世にいでました出世の本懐が、微笑の中からのべられたのであります。

「汝、今知るやいなや、阿弥陀仏ここを去ること遠からず……」

積尊はその素懐として、夫人に我等凡夫のために浄業を成就して下された弥陀仏のましますことを知らせたい御心で一杯なのであります。然し夫人は煩惱に覆われて眼はあれども無きが如くであります。

「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にしていまだ天眼を得ざれば遠くを観ること能わず。……」

とは、釈迦のしるしめす韋提のありのままの姿であります。そこに、智目とこしなえに閉じた愚痴の凡夫に、如何なる方便をめぐらしても、弥陀仏の御真実をとどけずばやまじとの善巧があらわれたのであります。

積尊は、先ず「定善」を修せよと詳しくのべられました。

これは、鏡のような水面には空の色も、雲のたたずまいもさながらに映りますように、私共の煩惱の波浪がしずまります時、仏とその国の莊嚴がそのまゝに観じられるのであります。然しその道を修する時、親鸞聖人の体験されましように

「定水をこらすといえども識浪しきりにうごき、心月を観ずといえども妄雲なお覆り。」

「近代の行人、觀法をもちいる能わず。若し仏像等を觀

みかぞかし」と語つていられます。

法然上人は、觀經の御積で、十悪、五逆の悪機の救済のところで

「この下品もつとも要なり。すこぶる我等が分に相当せり。」

と驚喜せられ、御自身は、聖覺法印に

「法は深妙なりといえども、我が機すべて及び難し。經典を披覽するに、その智、最愚なり。行法を修習するにその心ひるがえつてくらし云々」と悲歎述懐していられます。

ここに、定善の道も、散善の道も、一つは高嶺の月、一つは水中の月で、手もとどかないし、掴むことも出来ないことが知られるのであります。この深い崖におちて、のぼるすべのつきた者の上に、唯一無二の救いの網が

「汝好く是の語をたもて、是の語をたもてとは、無量寿仏の名をたもてとなり」

の仰せとなつて、尽末來際かけて單刀直入に、弥陀仏の御真実を伝えて下さるのであります。

弥陀經には「執持名号」の一つを、六方諸仏に証誠懺念

せんは、蓮慶、康慶が所造にすぎじ。若し宝樹等を觀せば、桜梅、桃李の花果等にすぎじ。」とありますのも上人の血のにじむ御修行の挙句の果ての告白であります。

積尊は、定善の及び難い者に、次に「散善」を修せよと勧められました。これは裡言にも、英雄にして英雄を知るとありますように、仏徳の真実を知るには、仏と同じ徳をそなえなければなりません。そのためには、仏法内の善根、世間道徳上の諸善を実行し、それを身につけてゆこうとする道であります。

ところが、この聖者の道を真剣に実践して見て始めて、自己の不完全な姿が見え始めるのであります。西田幾太郎先生は、その深い哲理から「逆対応」ということを説かれました。即ち、真実に近づこうとすればするほど、真実ならぬ自己、逆なる姿が映つて来る、と申されています。

親鸞聖人は、教行信証の信巻に「一切群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢汗惡染にして清淨の心なく、虚仮詭偽にして真実の心なし。……」

と仏意をうけて仰せられ、御自身には、「いずれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定す

せられつゝ、積尊は「我見是利」と讃えられ、またこの釈迦諸仏のあらわれ給う根源は、法蔵菩薩の大願にもとづくのであります。ここを結んで聖人は、

縱令一生造惡の 衆生引接のためにとて 称我名字を願じつゝ若不生者と誓いたり

と、讃仰され、しかも御身にうけられて、「親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」

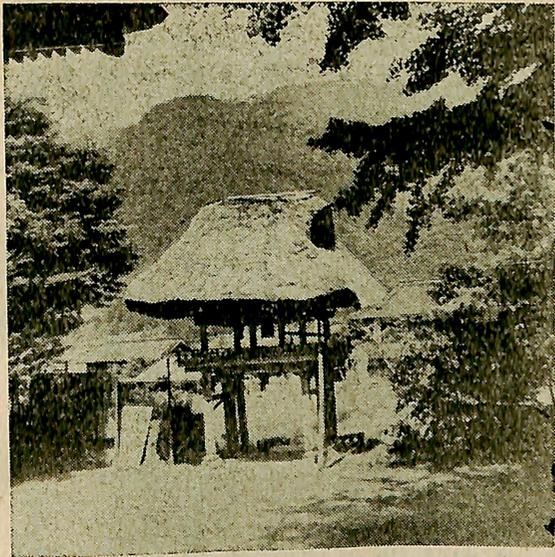
と、お勧め下さるのであります。法然上人はまた「一心專念弥陀名号……」の一句に

「余が如き下機の行法は、法蔵因位の昔、かねて定めおかるおや」と随喜されました。

釈迦微笑の素懐は、善導、法然、親鸞と、いきたまこと・いのちをうけて、現に只今我等の上にその光照をこうむるのであります。昭々として御声はひびくのであります。

道宗の遺跡を訪ねて

長谷顯性



行徳寺山門

昭和三十六年八月八日。この日は、西赤尾の道宗の遺蹟にま
いつて来た。その感激のほとぼりを記してみたいと、早朝めざめ
たまま筆をとった。

「あすこから、あすこの辺を通られたのでしよう」
と椅越はかまこしといわれている方向から井波の真上の栃原とちはらの二本杉ほんすぎの
あたりを指す。平生見なれている山々は見えなけれど見えるよ
うな気がする。私は正信偈の「譬如日光之雲霧雲霧之下明無闇」
を地で行く。

山内さんは本当に残念そうである。だから『御一代聞書』のお
言葉を何度も繰り返し返される。私は、ああ道宗さんは生きて喚ん
でいられるな、と思つた。御一代聞書の四十五条にその御文がある。
そしてそのあとに

「これを円如様きこしめしおよばれ、よく申したる、とおおせ
られそうらう」

とある。私はこの円如様のお氣持がよくわかるような気がする。
道宗さんが飛鳥のように、山のいただきを井波御坊へとはせつけ
た一心のすがたがおがまれる。

山内さんは聞法上の所感を述べられる。それを聞いてみると、
自分のことを云うているようで有難い。道宗さんの遺蹟に参りた
いといわれる志にも同感せられる。

話は尽きないが少し早目に寝につく、雨はしきりに降り続く。
明日は雨の中の赤尾行と覚悟してプランは明日きめることにし
て、明けてみると天気はすっかり快晴。

私はバスのことなど電話で問い合わせたり、時間表をしらべた
りして準備する。八時十分岩屋発、バスで井波へ。

駅では老若男女、乗客でごつたかえしている。加越線内もな

本年四月頃から、名古屋の山内青年が赤尾の道宗をたずねたい
としきりに願つていると、花田先生から聞いて、世にも殊勝な人
もあるものと感じ入つていたが、八月七日の夕刻に、久々に読書
していると、支関に声がかかる。出て見ると山内青年である。いや
よいところに来られたものだ。私は嬉しくなつた。何の準備もし
ていないけれど、それでもいいだろう。そして私は何のこともな
しに「牛にひかれて善光寺参り」とひとりごとを云つた。

山内さんと語る。

「道宗さまが井波の御坊へ山づたいに来られたというのはどの
山なんですか」

あいにく霧のようなもやがかかつて山は少しも見えない。

山内さんは道宗の言葉を口にしながら、窓の外を見やられるが、
すこしも見えない。

『御一代聞書』に「あかおの道宗申されてさうらう。一日のた
しなみには、朝のつとめにかかさじとたしなめ。一月のたしな
みには、ちかきところ御開山様の御座候ところまいるべしと
たしなめ。一年のたしなみには御本寺へまいるべしとたしなむ
べし」と、云々」

私も外を見やる。やつぱり見えない。

かゝ混雑していた。雨上りの夏、すつきり雨で洗い清められた
上をきやびらかな日の光が、青空にきらめく。夏といえどもす
が／＼しい、五、六年振りで赤尾詣のできる身のしあわせを味う。
だが出発直前に「五ヶ山バスで土砂くずれのため死なれんか知ら
んと不安ですよ、それから赤尾に是非一泊されなければいかん
ですか」と云つた妻の言葉がチクリと心のどこかにささつて痛
い。

九時五分、城端駅着。すぐ国鉄バスに乗りかえる。美濃白鳥行
である。京都から西赤尾行きだという青年男女六人が居る、彼等
の言動から察するとひよつとすると、私たちと同じく道宗遺蹟詣
かも知れぬと思つた——後で西赤尾で下車したが、彼等はお寺の
右隣りの重要文化財に指定されている合掌造りで有名な岩瀬家に
這入つて行つた。どうも私たちとは平行線らしかった。

城端から西赤尾までは距離は二十八キロ。バスで約三時間であ
るが、始めは平村の下梨まで小高い山々の腹を道は迂廻して
ラセン形にのぼつて行き、またくる／＼とまわつて盆地におりて
行く約二時間の行程は、道が狭い上に右側がけわしい崖の連続
で、絶えずハラ／＼する。スリル満点である。バスの中では例の
青年たちは窓の外を見たり、お互いささやき合つたりしている
が、言葉数はいたつてすくない。

私の右隣の六十五、六のおつさんは「あなたは何処までおいで
ですか」とたずねると「白鳥までだす」と答えたきり眼を閉じて
おし黙つてしまつた。彼はこの辺をよく通る人らしく、その態度
から察すると、このバスは崖の下に落ちることはまず／＼あるま

いが、それでも万一落ちて自分だけは何ともなからうと考えているみたいな恰好である。山内さんは私のすぐ後に腰かけているが、余り話も出来ない。私の心中では一瞬にも煩惱妄念がもたびちたび出沒するのでどうにもならない。若しバスが崖から落ちたらどうあるだろう。どす黒い血に染つて屍が十五、六そこそこころがつて、家族はあわてふためいてかけつける。傍観者が眼をそむけて通りすぎて行く。……心細いこと、心細いこと。

若い男女は「やあすごい！」と云つて顔を見合わせ、それきり沈黙。人食谷の手にさしかかつた。細尾峠を越すと道はジツクザツクとなり、馬の背のように両側が低くなつていて、本当にけわしい。時々警笛を鳴らしながらバスはスーツスーツとスピードをおとさないで疾走する。私は運転手の背姿を見つめている。運転手がちよつともハンドルを把り誤つたらどうだろうか。途中でトラックとすれちがうとき、バスが後退してバウンドした時、ひやつとした——山内さんはあの時これはとおもいましたよといつていた——私は運転手の腕に私たちの生命を托しているのだなとおもつた。信の道もこれと同じでないかなとおもつた。……バスは細尾峠で十五分間、下梨では十七分間許り休んだ。細井峠では車外に立つて夏の日光にきらめく南礪の山々を眺めた、実にきれいだ。秋十一月、紅葉の頃ともなれば、その美しいわんかたなしといわれている。

下梨では中食の用意。山内さんはパンと生菓子、私は水蜜桃を買う。下梨は山の中の大都会である。下梨からバスは庄内川の左岸に出て平坦な道となるので気も楽になる。ここから赤尾までは

り、

「ごしようの一大事のちのあらん限りゆだんあるまじき事」と、二十一箇条の冒頭の言葉を、版画家、棟方志功が描いている。

軍裡の横の道水のゆるやかな流れの音と、蟬の短い鳴き声が聞えて来ると、この別天地に秋近しの感あり、山門の蒼蒼を見ながら涼風にあたる。庭さきの栗や梨の木、小川の縁の紅百合がしげみとなつて今を盛りと咲き乱れている。山内さんは暫く何にもいわずに感慨に耽つているらしい。遙々ここまで来たその心根の何からやましくおもわれる一コマである。

道宗静夫氏に案内せられて本堂に入る。内陣余間に、先ず宝庫よりとり出して来られた図絵が掛けられている。

香煙立ちのほる前で道宗の生い立ちから話される。

「道宗は平家の落人の一人の後裔に生れ、幼にして父母に死別された淋しい生活であつた。道宗の信の生活は、父母を恋しいたりみどり児のころからであつたという。小鳥が親の鳥とたのしく遊んでいるのを見て、自分はどうして父母がないのだろうとなげかれたという。

あまり愁歎されるので叔父の浄徳さんが九州に五百羅漢があつて、そこへ行けば、ニツコリほほえむのがあるが、それが父母に似ているからと、詣つて来ることを勧められた。

親恋しい一念の道宗はそれに従つて出かけた。そして途中福井県のアツというところまで行かれたが、道中での疲れを覚え、あるところで仮寝した時夢を見られた。その夢に、一人の聖僧があらわれて、「汝が五百羅漢をたずねて九州への旅に出たこ

約一時間のコースで、なめらかに走る。周囲は静かで美しい。小原發電所が見え、合掌造りの家々が去来する。

皆禪小学校の前を通る。立派な建物である。もう三十年も前にもなるう、私の幼な友達がこの山の小学校に赴任する時、決死の覚悟で山の雪路を歩いて行つたと語つたことがあつた。時世は移つたなとおもつた。

やがて右側に家々が群り、その中に一だんきわ立つて高い御堂の屋根が見える。「あれが行徳寺なんです」と指す方向に山内さんの眼はかがやく。

西赤尾の橋を渡つて庄川の右岸に出る。小学校中学校をすぎると部落があつて、これが赤尾の村である。お寺のすぐ向いにある旅館の前でバスはとまつた。十二時すこし前。ラジオが午刻を報ずるのをききながら行徳寺の山門をくぐつた。

先ず軍裡の方に行くと、当主、道宗静夫氏は今山から帰つて来たというて休んでいられた。ヤーと声をかけると、ヤー久振りだというわけ。まあ万事OKだ。

控間に請じ入れられ、お茶とミルクの接待をうけて中食を認める。「道宗さんを慕うて名古屋から山内さんが来られたので私はお伴して来ましたが、どうかよろしく」と挨拶する。道宗氏は今五十恰好の年輩であるが白髪が多いのにはびつくりした。然し元気のいいのは若い時と少しも変らぬ。道宗さんの血が流れていて、恐らく道宗さんもこういうような人だつたらうとなつかしくなる。

控間には、知恩則是大慈本、という香樹院師の幅がかかつてあ

とはまことに殊勝なことである。さり乍ら、たとい五百羅漢にあり、父母の姿に接し得たとしても、また別れということがあろうか。それには京都に蓮如上人という大徳があつて教を説いていられるから、その方に逢つてお話をきくがよい、

この夢によつて道宗は九州に下ることを思い止まり、京都山科に蓮如上人のお教を聴聞する身となつた。三日三晩寢食を忘れて聴聞したので、その熱心さが蓮如上人の眼にとまつて、「あの人は何という者か」と問われ、「越中赤尾の生れで、第七と申すもので、父母に逢いたい一念で来られた」と聞かれて感動なされ、ゆつくり滞在してよく仏の教をきかれるようにと申されたという。

これが道宗が上人の教を聴聞するようになった始めである。道宗、時に三十歳であつた。

「道宗は一つお詞をいつも聴聞申すが始めたるようになりがたき由、申されさうらう」

生きた言葉を、生きた耳が聞いたのである。……道宗に就いての逸話は世に伝えられるものがいくつかあるが、その中で道宗が優しい人であつたことを描いた絵がある。道宗が同行二、三と仏法讚嘆している部屋の縁側に鳥が五、六羽聴聞しているのである。何のおそれるところもなく、のび／＼と身体をのばして嬉しそうに聞き入つているのである、道宗の慈愛のところが鳥にも感じられているわしき。

また、道宗が念仏行者として、その徳が近隣にきこえていた

時、ある人が、その真偽の程を疑つて、一つ試してみようと、道宗が島で仕事をしているとところを、いきなり、足で腰のあたりを蹴つて道宗を打ちたおした。につこりして立ち直つたのを見て、これはとおもつたが、二度三度と前と同じように蹴倒した。でも道宗は、その度毎につこりして立ち直るのであつた。何故そんなことをするのかと詰問することもなく、にこ／＼しているのはびつくりして、その理由をたずねると、道宗は平然として答えた。

「私は前世で人を蹴倒したことがあるらしいが、今生でその償いを只今さしていただけたかと思つて嬉しうなつたのです」

この道宗の人世観にはすぐにはうなづけないものがあるけれども、何か悠久な因縁所生の実相にめざめた信心の智慧に敬服させられるのである。

また、ある寒い冬の朝、道宗が、ああ今日は寒さがきびしい、若い自分さえこうであれば、まして御老体の上人様はどんなに寒いことであろうと、京都の方に向いて、火鉢に火を入れて上人にささげて、どうぞおあたり下されと念じられた。寒い冬が過ぎて道宗が上落して上人にお眼にかかられると、この冬はおかげで寒い目にあわずにすんで有難う、とお礼の言葉をのべられたという。

道宗に与えられた蓮如上人真筆の御文がある。道宗が上落に際して奥さんから、蓮如上人から一筆書いたものを頂戴して来て下さいとたのまれたので、早速上人に自分の妻に何か一筆おねがいしますと申上げると、上人は六字の名号を書いて、道宗にわたさ

れた。道宗は赤尾に帰つて、その名号を出すと、奥さんは物足らなそうなので、どうしたのかと質すと

「六字の名号に何の不足もないけれど、実は私は御名号のおいわれをもつと詳しくお述べになつた御文を書いて頂きたかつたのです。私のおねがいの仕方が充分でなかつたからです」

と答える。

「私の聞き方が悪かつたようじや。それじや、あなたの所望通り、上人様に御文をいただいで来ましよう」

と草鞋の紐も解かず、そのまま引き帰して上落し、上人から改めて書いて頂いたものだという。それには

「御文なら紛失するということがあるが、六字の名号を心に頂けばおとすということはない。……鶴の脛あしの長きは長いまま、鴨かもの脛あしの短きは短いまま、そのまま仏の本願をいただければ、

凡夫が仏になる……」

という旨が書かれてある。上人の真心の籠つた御文もさることながら、上人に御文をいただこうとすぐ上落した道宗の胸のうちが思われる。道宗静夫氏は、この事は道宗さんの求道心の真面目を伝えておると同時に、道宗と上人との親密な間柄をも知らされることも云われたが、実にもと背そむなわれることである。

それから、道宗が蓮如上人の御文を書写されたものが二幅ある。上人の筆勢と殆んど同じように、上人のなさつた通りにしようという気持があり／＼とうかがわれるといわれて来たものである。全く己を捨てて教に順おうという信心の姿が如実にあらわれている。

「近江の湖を一人してりめよと仰せられても、善知識の仰せならば必ず成るべし。この凡夫さえ仏になるのであるから、成らぬということあるべからず」と申された、道宗の言葉が躍っている。

最後に、上人の書かれた楷書の六字の御名号がある。これは私は今度初めて拝見したものである。実は蓮如上人の真筆と伝えてきているけれど楷書の六字名号は、蓮如上人のものかどうか疑わしいという人があつたので、いささか展覧を控えていたものだが、近頃矢張り真筆と信じているとのことであつた。ある修養の積んだ書家に他の真筆と一しよに、これは同一人のものかどうか質してみたら、全く同一人の作だという証明を得た。また同一人の筆勢がかくも違うのはどういふわけかと質すと、同一人の筆であつても、それを書くときの気持の違いで筆勢もちがつて来るものであるとのことであつたそうである。

さてこの楷書の御名号にはこういう伝説があるそうである。上人北国御在世のとき、一日上人が道宗の居宅に來化されるにきまつていたのに、俄かに差し支えが出来、上人は自分が行く代りにこの御名号を拜んでくれといつて道宗に下さつたというのである。

後程、大谷大学の日下無倫氏にお眼にかけたら、これは上人の稀にある楷書の御名号の一つであつて、間違ひなく上人の真筆だと裏づけされたそうである。

道宗氏の敬虔な言葉を書きながら、ゲーッと道宗の遺品を拝している、四百五十年の時間は消えて、今ここに道宗さんが念仏

していられるような気がするのであつた。

道宗が、邪見、橋慢にとどまろうとする自己に鞭うち、御仏様の四十八願の広大なお心を味おうと云つて、四十八本の割あかし木の上に臥せつて、念仏されたことや、旅の宿りでは蕎麦敷を布ふいて背にあたつて痛いため眠れないままに報恩の念仏されたことは余りに有名なことであるが、その割木の上に臥せていられる道宗の像があり、更に蓮如上人がおかくれになつた時、悲歎にくれているのを憐れと思われて、円如様が、かねて父上の蓮如上人から形見として頂戴しておられた上人自作の壽像を道宗に下さつた。

道宗は生涯この御像に、生ける師匠につかえるが如くかかずきおられたとのことである。上人を拜んでいられた道宗さんの姿が尊い。

さて控間に帰つて、道宗の書写された御文の書冊や、蓮如上人から頂いて常に肌身につけて居られた小さい六字の御名号や、赤尾の道宗心得二十一ヶ条、等を拜見して心ゆくばかり道宗を偲しのばして頂いた。御一代聞書にある道宗の言葉や、二十一ヶ条は改めて拝読しようと思う。

教行信証『信卷』講話

(七)

近角常観

八 堅固信心等

さてこの位にして次に移り、

『深信は即ち是れ堅固深信なり。』

この頂いた信心は堅固深信であるというのは、これもこちらで思う堅固深信ではない。向う様の広大の御まことの故に、それが遂にこちらに届いて下されたのだから堅固深信なのである。私の方で堅固になるのではなくして、向う様の広大の御心であるから堅固なのである。死ぬとすると私共恐しいばかりであるも、それを墮さぬお慈悲の御真実と頂くと、これ程の堅固は無いのであります。次に、

『堅固深信は即ち是れ決定心なり』

決定とは、このお見捨てのなき慈悲により、往生一定、お助け決定と、夜が明け決定された味いである。

全体私共平日言いつけて居る言葉故さほどに驚かぬのであるけれども、決定とはひどい言葉である。決定してもう間違わぬという言葉である。どう決定かというに、仏の遣る瀨のない真実と、私の不実と角力とり、向う様のお見

れ真心である。

『真心は即ち是れ相続心なり』

こは淳心、一心、相続心の三信のことは、曇鸞、道綽の二師が言い置かれてある。それをここに繰り反されたのであります。真心はまこと故、即ち続くところの心である。続くとは、べた一面にあるのなら、相続といふことは言わぬ。相続とは切れては続き／＼するから相続である。念珠は個々別々の珠が糸でつながれてあるの故、即ち物ありて続いて居るのである。私共如来の御まことを頂いた心も、煩惱の水火のため始終、と切れ／＼にはなるけれども、根が遣る瀨ない御慈悲に基いた信心なれば、お慈悲が変らぬため信心も相続するのであります。故に『帖外和讃』のお示しに

金剛堅固の信心は、

仏の相続よりおこる。

他力の方便なくしては、

いかでか決定心をえん。

私共の方は乱れ通しであるも、仏よりその私を忘れ給わず、飽くまで／＼お見限りなきお慈悲である為に、私共の方は相続出来る者ではなけれども、その仏の相続より、金剛堅固の信心も起るとの仰せであります。次に、

『相続心は即ち是れ淳心なり』

淳心は、一分一厘も雜りけなき純一無雜の心である。私共の方は雜りければかしの者であるに、どうして雜りけなく仏

捨てない御真実に気がついたため、如何にしむといふ私も敗かされて、その敗かされた時が決定である。

一度遣る瀨のない御真実につかまれた上は、もう間違おうにも間違わぬ。故に蓮如上人は「たのむ一念の時、往生は一定、御助けは治定」と、この決定味を始終お知らせ下さるのであります。

次には、

『決定心は即ち是れ無上々心なり』

これは『和讃』にも

無上々は真解脱、

真解脱は如来なり、

真解脱に到りてぞ、

無愛無疑とはあらわるる。

とありて、この上ない上にもなお上の無い、如来の広大の御まことを頂いて決定したる信心なれば、即ち是れ無上々心である。

『無上上心は即ち是れ真心なり』

此の上の無い上にも上の無い広大な信心は、何処から来るとなれば、即ち仏の真実より来る。故に無上上心は即ち是

を喜ぶことが出来るかというに、仏の仰せが餘りに／＼尊いからである。

私共、我慢勝他の塊りの人間が、どうして「孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸するが如く」専ら仏に仕えることが出来るかというに、私共の方に仕える力がありて仕えるのではない。主君の仁慈の思召の餘りに／＼広大である事が、一度心に分つて来る処から、もう今までのように忠義を尽くすの尽くさぬのと言うて居られぬ。恐れ入りてつまらぬ身体なれども、一命を投げ出してつかえさして貰うという、純一無雜の心も起つて来るのであります。

九 憶念

次に

『淳心は即ち是れ憶念なり。』

憶念は憶持して忘れざる心である。私の方は常に煩惱に障えられ、忘れ勝ちであるけれども、その者のために飽くまで障えず、広大のお心を運んで下さる不思議の思召であることを知らして貰うて見ると、もうこの御まことばかりは有難くて忘れようにも忘れられぬ。

『和讃』には

弥陀の尊号となえつつ

信樂まことにうるひとは、

憶念の心つねにして、

仏報恩するおもいあり。

とも仰せられてあります。次に

『憶念は即ち是れ真実の一心なり』

真実は、真は仮かりならざること、実は充実で、空虚ならざることである。今にこの頂きたる信心は嘘でない仮でない。真実はかりの仏の廣大の御心をそのまま丸頂きにしたる姿であれば、即ち是れ真実の一心である。而して

『真実の一心は、即ち是れ大慶喜心なり』

その廣大の仏の御真実が、私の心に届いて下されたのであるから、信仰には大慶喜心が起つて、餘りに／＼思召の有難さに、立つても居てもいらぬ喜びが現らわれて来る。

『大慶喜心は即ち是れ真実の信心なり』

この大慶喜心の喜びは、何から来るとなれば、即ち今までそれとも思つて居なかつた処に、思いがけなく真実の仏の思召しを知らざる処から、初めて如来のお慈悲に接して、恐れ入つて出て来る喜びであれば、即ちこの心は是れ真実の信心である。

『真実の信心は即ち是れ金剛心なり』

すれば、この心は、仏の御まことの私の識心しきしんに徹入てつにゅうして下された信心であれば、如何な事ありてももう変らぬ。

即ち金剛心であつて、火にも焼けず、水にも腐らぬ。この金剛心なるお言葉は、何気なく言うて居るなれども、容易たやすからぬお言葉で、この講本の後の処には

真に知ぬ。弥勒みろく大士は等覚じやうかくの金剛心を窮むるが故に、

に、その廣大のお心を仏より賜わる故、私共の一念の信心にその廣大のお心が籠つてあるとの仰せなのであります。

次には

『度衆生心は即ち是れ衆生を撰取して、安樂淨土に生ぜしむる心なり。』

さて斯く頂かして貰つた一念の信心は、一切衆生を撰取して往生を遂げしめて下さる、廣大なる度衆生心の籠こもつてある信心であるが、之も信心が頂けると我々にその心が起つて来ると取つてはいかぬ。今云う如く願作仏心、度衆生心は、私共が頂かして貰つた信心を直ぐ押えての仰せであることを忘れてはならぬのであります。次に

『是の心は即ち是れ大菩提心なり』

初席来言しよ如く、法然聖人は、弥陀の本願には大菩提心は無いとお示し下された。成る程、自力の菩提心は無けれども、その廣大のお心を頂くと、それが即ち廣大の願作仏心、度衆生心である。即ち淨土の大菩提心であることは、再再申した通りであります。次に

『是の心は即ち是れ大慈悲心なり』

この淨土の大菩提心は即ち大慈悲であることは、全体大慈大悲は阿弥陀仏のお慈悲が大慈、悲なのである。仏が私共を救うて下さる思召しが大慈大悲なのであります。けれども勿体なきことながら、その仏の大慈大悲が私共の心に届

竜華りゆうわ三会の曉には無上覺位を極むべし。念仏の衆生は横超おちらの金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃ぢやうりやうを超証ちやうしやうす。

とも言われてあります。次に

『金剛心は即ち是れ願作仏心なり』

は、願作仏心は普通には、上求菩提じやうきふだい、下化衆生の菩提心げげしやうじやうを起して、仏に作りたいたいと願ひ求むる心である。併し今この願作仏心は、我々が仏に作りたいたいと願ひ求むる心ではない。仏の方より、設たとい我仏を得たらんにと、私のために廣大の願作仏心を起して下された。その仏の願作仏心が私の心に届いて下された有様が、一念開發の信心なのである。故に一念開發の信心には、自らその廣大の御心が願あらわれて「淨土に参らして貰いたい」との念も起つて来る。即ち私共の頂いた信心が、直ぐ仏より御廻向の廣大の願作仏心であるのであります。次に

『願作仏心は即ち是れ度衆生心なり』

之も仏が私共を救い遂げずば正覚を取らぬと、廣大の誓いをお建て下された。その仏の度衆生心が私の心に届いて下された度衆生心である。信心頂くと私共の方に一切衆生しやうじやうを濟度さいどする度衆生心が起つて来るといふことではないのであります。総てこの願作仏心、度衆生は、私共が頂く一念

いて下さるの故、私共の頂く一念の信心には、その廣大のお心が具わりである。即ち私共が信心を頂くと、一切衆生を哀れみ助ける大慈大悲心が現われて来るといふのではなくして、その頂いた信心が直ぐに廣大の大慈大悲心であるとの仰せなのであります。こは『歎異抄』の御教化にも

慈悲に聖道、淨土のかわりめあり。…淨土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもておもうが如く衆生を利益するをいうべきなり。…しかれば念仏申すのみぞ、未通りたる大慈大悲心にて候べき。

「念仏申すのみぞ未通りたる大慈大悲心にては候べき」なのである。私共廣大の御真実を頂きて念仏喜ぶと、極樂に参らせて貰つて仏となり、思うが如く衆生を助け遂げることの出来る大慈大悲心ではあるが、その然り出来る力は、廣大の大慈大悲を頂かせて貰つた一念の信心に、はや仏より賜わつて居るのである。故に「念仏申すのみぞ未通りたる大慈大悲心にては候べき」…頂く所の一念の信心が直ぐ廣大の大慈大悲心だとの仰せであります。

十 大慈悲は是れ仏道の正因

次に

『是の心即ち是れ無量光明恵に由つて生ずるが故に、願海平等なる由に発心等し、発心等しきが故に道等し、道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なる

が故に。」

さてその大慈大悲心は、阿弥陀仏の大慈大悲心なるか故に私共凡夫所生の自力の心ではない。廣大なる一如の仏境界より私共迷いの凡夫の有様を御覽下さると、如何にもその迷いの有様が哀れでならぬ処から、廣大なる智慧光明を放ちて現れて下されたが廣大の阿弥陀仏にましますのである。故にその智慧光明より遺瀨なく思召し下さる大慈大悲心なるが故に「この心、即ち是れ無量光明慧に由つて生ずるが故に」であります。「願海平等なるが故に発心等し」は、抑々仏の本願は

弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんがために。云々。(選択集)

即ち仏の本願は、老少善悪を簡はず、如何なる者にも平等に哀れみを加えんとの廣大の本願にましますが故に、本願が平等故に発心も亦等しいとである。発心等しいとは、仏が私共を助くる／＼との仏の発菩提心が等しいとであり、而してその發菩提心が等しい故に、仏の菩提の道も等しいのである。菩提の道が等しい故に、それより来る大慈悲心で亦平等である。もと／＼平等の願海より来る大慈悲心であるからであります。而してその大慈大悲心が私共の心に届いて下されて、それが頂けた処が信心である故に、「大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に。」……今私共

と、かく飽くまで／＼お見捨てなき思召しであるために、如何な鉄、石塊の私も、真底からその思いかげざるお慈悲のために恐れ入つて、融かされずには居られなくなる。これが悪人成仏のお慈悲の御本意が私の心に届いて下さるからであります。で私共唯空に「かかる浅間しき者をお助け／＼」と言うているのでは、何時までたつても融けぬ。それは上面からかぶせているのであるからである。テンブラであるからである。それでは何の役にも立たぬ。私共の悪しきを見捨てず、飽くまで石塊、土塊の私の心底まで、融かさな措かぬとの廣大のお慈悲に實際出遇わせて貰うからこそ。御同よう如き悪人も。ここに始めてその思召し一つに腹ふくれて、満足させて貰うとなるのである。故に御同よう如き悪人なれども。この悪人の心の中に入り満ちて下さる大慈悲心こそ、実に仏道の正因であるとの仰せであるのであります。

それで私が平日、皆さんにお話しているに、私では言えるだけ言うているのであるけれども、私の言う何れ聞かれても、「悪いけれどもお助け」と、かぶせるように聞かされてはならぬのである。何うも私共、表には有難い／＼と言いながらぬ、裏に何処か隠れて居る処があるようになりてはならぬ、処が今仏は「それ見よ／＼、裏にまだ隠れて居る処があるぞ」と何処までも追い詰めて／＼搜して下さるお

の斯く罪深きを飽くまで哀れみ思召す大慈悲心が仏道の正因だとあります。これは『歎異抄』第三章の御示しに

煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなるることあるべからざるを憐み給いて、願をおこし給う本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。云々。

何も世間一通りのお慈悲なら、大慈大悲心などとは言わぬ。大慈大悲心は、私共いずれの行にても生死を離るることある可からざる者、一切諸仏の手では到底助らぬ者を助けようとの廣大の思召しにましますが故に、大慈大悲という。故にその大慈大悲の御本意は「悪人成仏のためなれば他力をたのみたてまつる悪人もつとも往生の正因なり」……道の絶え果てた悪人程よけ哀れで捨てられぬとあるが仏の大慈大悲の御本意なのである。故に私共、この大悲の御心を聞かして貰うた時は「実に自分程の悪人はなかつた、何処に一個所取り処なき、実に自分は罪惡の塊、悩みの塊」とのことが分つて来る。而してその仕ようなき自分を何処までも哀れ／＼とある廣大の御恵みは、実に石の私、鉄の私をば、飽くまでも見捨てさせられざる廣大の思召しである。

「ああかほどまでの有難い思召しとは、誠に仏は恵みの塊、お慈悲の塊」

慈悲である為に、もう隠れ所がなくなりて、終に押入れに隠れてしまう。けれども仏はその押入れまで迫りて、「そら出よ／＼」と言うて下さる御親切であるために、もうしやうがなくなりて、終に赤裸のまま打出し、「ここまで御存知下されたの仰せであつたか、有難や」と頂かして貰う信心なのである。

そして仰しやるには「君、有難い／＼で、君のは挨拶ばかりぢや、来ないかね」「イヤ直ぐ参ります」と。なおも遁げ尻構えて居る者を、飽くまで襟上つかんで放し給わぬお慈悲であるために、もう仕方がなくなりて、まる／＼身を投げ出し「私が悪うござりました」と、表も裏もなくなる。お慈悲の味いは「こころ一つなのであります。であるからお慈悲の味いは「こんな者でもお助け／＼」と返事ばかりして居て遁げて居るのでもなければ「こんなことではいかぬ」と遠慮するのでも無い。

そういう何処までも素直に人の言うことが聞けぬのが私の石、鉄の性分なのである、けれども、その石、鉄を飽くまで融かさな措かぬとの廣大のお心に面の当り臨まれるため、石、鉄の私が、如何にも／＼思召の忝けなきに恐入りて「ああ有難や」と、石、鉄の私が心底まで廣大の思召しに融けてしまうのである。大慈大悲は是れ一つが有難いのであります。

南無阿弥陀仏。

あとがき

秋が闊けて行きます。十一月の池山先生の忌月を迎え、記念号を編集いたしました。「念を法界に流す」は、先生の最初の著書、「絶対他力と体験」の終りを転載させて頂きました。

「靈前に語る」は友子夫人の御手記から頂き、先生の御臨末の貴重な御法語を誌させて頂きました。

最近、知友の方々の上に、悲喜交々の事件が引き続いておこり、種々なことを教えられて居ります。

そのうちお二人は人生の門出に破鏡の憂き目、またはそれに近い悲劇の中から、幸にも念仏に目をひらかれ、阿彌世われなりの表白懺悔に帰られ、今三人は破鏡のままに、人生的処理も未済のまま心労を続けられて居る人。更に突然御主人の不治の病に取られ乱して為すすべも無くなつた方。また挙式も旬日に迫つて、楽しい夢の中にあけられていられる人。等々。

そこには「生死の苦悔ほとりなし」との聖人の御和讃を仰ぎ、同時に「弥陀弘誓の船のみぞのせて必ずわたしける」を身に深く頂きますと共に、一人のこらず、この弘誓の船のましますことを、一日も早く、一刻も速かに、共に気づかして頂きたいと願われてなりません。

図書紹介

信仰体験録

安波敷八著(医師)

第一編 死の宣告を受けて

第二編 余が入信の径路

第三編 真理と信仰

第四編 随感録

定価二八〇円、送料六〇円。京都市左京区高野泉町四〇文明堂、振替、京都七七三四番。

本書は初版が大正十五年に出まして以来重版を続け、終戦後も二版目となりました。本書によつて無限の安慰と指針を得られた方も多く、ことに病者には無二の良書と信じます。

法悦抄

清水清吉 著

第一編 開光願生 第二編 不問語

第三編 書簡

定価二二〇円、送料六〇円。文明堂、京都七七三四番。

清水さんは、同郷の宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」を地に行うて、いつも口からは南無阿彌陀仏の尊号を響かせて伝えて下さつたので、四十九年の生涯はあまりにも短いものでしたが、其間に自然に漏れた信仰余瀝が本書であります。読む者をして自然にあたためられ、ほのぼのとしたあかるみを与えられる書であります。

御案内

十二月一日午後六時半。於一道会館

福島政雄先生講話予定

名古屋市南区駈上町二ノ八八番地

毎月第一、二、三日曜午後一時半、講話

会。第一日曜歡興抄、第二日曜、正信偈。

毎月廿四日、午前、午後、昭和区小椋町

教西寺。法話会。

十一月廿九日、午後、四日市々大矢知町

真西寺

定価一部 二十五円(送共)

半年 百五十円(送共)

一年 三百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番